



カメラマンになりたかった。

マリは、彼女のボーイ・フレンドたちから「赤の間」とひやかされるまっかな壁紙の部屋の、クイーン・サイズのベッドに寝ころんで、普段は人前でみせることのない素肌に大の字の露わな格好で、もう一度、カメラマンになりたかった、と声にだした。

部屋は寝室とよぶにはリビングほどにひろいというのに、中央に鎮座するベッドと壁にうめこまれたスピーカー等のサウンド・システム、空調設備があるだけで、ほかには何も物がない。マリのこの寝室に入る者は、ボーイ・フレンドもふくめて衣服の一切を身につけることを許されなかった。マリ自身も常日頃、寝室に通じる書斎のなかで服飾のいっさいを取り外し、いかなる時間帯でもこの部屋のなかでは裸になることを生活の規律としていた。

寝室に通じる書斎には大きな窓があった。けれど、この寝室には窓がなく、ただ赤い。それで、彼女のボーイ・フレンドたちからは「赤の間」と冷やかされてきたのだったが、マリにとってはそれは何の「冷やかし」でもなく、彼女は真面目だった。マリは赤という色を愛していた。

自分の人生を色であらわすならば、赤のマリでありたい。マリは思春期のころに、決断したのだ。マリがそう決断した時期というのは、感受性豊かな子女なら誰しものがそうであるように、マリもまた、将来に対するぼんやりとした不安につつまれていて、世間を知らないのに夢や希望だけは膨らんでいくというのに、現実世界における自分の場所がわからず、自分自身というものさえ把握できない状態のなかだった。

マリはそんな嵐の時代のなかで、「好きな色をひとつ、きめよう」と考えた一夜があった。世間知らずでも自分の可能性が未知数でも、自分の色を決めることはできたからだ。マリは迷わず、赤を選んだ。そうして彼女はそれ以来、赤い女になったのだ。

こういう話を人前で話さなくなったマリだったが、まだ彼女が見習いカメラマンとして一人暮らしをはじめたころ、6畳一間のアパートの壁紙をすべて赤に貼りかえて「アパートでは全裸ですごしている」と話をする、当時のボーイ・フレンド（マリには、いつもマリと彼女の男たちと名づけられるボーイ・フレンドがいた）たちは何かの悪い冗談なのか、と本気にしなかったし、実際にその赤いアパートに入って、マリから強制的に全裸にさせられたボーイ・フレンドたちは、マリがカメラマン志望であるから、藝術家としての行動なんだろうと肯定的に解釈していた。

当時から“ちょっと変わっていた”マリの「赤い部屋」の話を含めてなんでも気兼ねなく話せた唯

一の例外が、スペイン酒場で働いていたスペイン人のペペという50代の男性で、ペペとマリは恋愛関係にあったわけではなかったが、カメラマン見習いとしてなかなか芽がでなかったマリが一人、スペイン酒場（まだBALという名称は日本でなじんでいなかった）に立ち寄ると、夕方だろうが真夜中だろうがいつでもカウンターの奥でフライパンをにぎっているペペが、いつでも数種類のタパスでマリを歓迎したのだった。

赤い色を思想として自分の体にしみこませる生活をしているマリのなにもかもが、日本で働くペペに母国スペインの、情熱に生きる女を思い出させたのであろう。まだかけだしの見習いカメラマンだったマリには、毎晩スペイン料理を食べるほどの金銭的な余裕もなかったのだが、「お嬢さんには俺の料理を食べつくしてほしい」といって、マリの代金はきまって一回500円しか受け取らなかった。

ペペはマリに、しきりに「きみは、味がわかる」「きみは、女サヴァランになれる」「きみは……きみが食べるのをみていると、俺はこの店にある最高の食材をつかって料理をつくりたくなる」といった。マリは褒められることがそんなに好きではなかったけれど、ペペはいつもマリがやってくると、営業度外視の大赤字で最高のスペイン料理をマリに供した。とくにマリは「アングラス・デ・アギナガ」というウナギの稚魚をオリーブオイルと唐辛子で炒めた一品が好きで、これはペペの店でしか食べることができなかった。

こうしてカメラマン見習いとしての日々は、順調にはじまろうとしていたのだったが、ペペは、一流の料理ジャーナリストとしてマリを育てたいという密かな野望があったようで、マリをペペの国際色豊かな人脈に紹介しはじめ、マリにはさっそく料理を食べてエッセイを書く仕事がまわってきた。マリはカメラマンとして仕事を引き受けていたのだが、マリの舌はいつも迷いがなく、料理人の本質を言い当てるので、いつしかマリ自身も「食べて、書く」生活が当たり前なものになっていたのだ。

料理ジャーナリストとして世の中から広く認められるようになったマリは、日本中の料理店を「食べて、書く」ことになり、毎日がホテル暮らしとなって10年以上の年月がすぎ、以前のようにペペの店に通うこともままならなくなった。

ペペが日本の店をたたんで本国スペインに帰るので、最後に会いたいと連絡をくれた日を、マリは今でも覚えている。

冬の寒い日で、分刻みで「食べて、書く」ことをし続けなければならぬマリには、結局、営業最終日に間に合わず、ペペがスペインに出発する前夜の真夜中になってしまったのだ。

その日は、珍しく雪が降っていて、マリが店の扉をあけると、調理器具はもう何もなかった。電気さえ止まっていたのである。そこには、アラジンの時代から使われているようなランプの火がともっていて、ほの暗いなかに、すっかり老いてしまったペペが、スチールの椅子に座ってマリが来るのを待っていた。

マリが「遅くなって……」と、謝ろうとすると、ペペはマリに最後まで言わせることなく、「いいんだいいんだ、日本にはうまいものをうまい、と紹介できるジャーナリストがいなかった。マリを一流のジャーナリストに育てたのは俺なのだから」と、あいかわらず片言な日本語で言いながら、マリに自分のとなりのスチールの椅子に座るように言った。

マリの寝室は赤一色だが、その日のペペの店は、それはもう店と呼ぶにはその面影もなく、ランプに照らされたペペとマリの顔だけがかろうじてみえるだけで、真っ暗闇だった。

ペペはひょいと立ち上がったかと思うと、おそらく暗くてみえないが壁に吊るしていたであろう巨大な塊をかかえて、二人が座っていたカウンター席に、どん、と置いた。

マリもペペも、二人とも無言のままで、それは厳粛な儀式のようだった。ペペは、かつて「ナイフを持っていないスペイン人の男は、スペイン人でないか、男ではないかのどっちかだ」と自慢げに言っていたものだったが、マリは、はじめてペペのナイフをみた。

ナイフといって想像していたような穏やかな料理ナイフではなく、ペペの顔が暗殺犯に見えるほどによく磨かれた狩猟用ナイフだった。そのナイフの刃が、ランプのひかりをうけて鈍く、しかし、キラキラと光ったかと思うと、さきほどもってきた塊を、滑らかに切り裂いていった。

室内全体が古くてカビくさいようにマリは思っていたが、それは室内のにおいではなく、この

塊が発する獣肉の匂いだったようで、ペペがそのかたまりーハモン・セラーノーのカビの部分を切り取ると、雪のように白い脂身がでて、その内側に、みごとに艶のある赤がみえた。

「マリ、そっちに、フィーノがあるだろう」

ペペに言われて、マリはカウンターを見渡してみると、ようやく部屋の暗闇に目がなれたのか、そこにはシェリー酒の瓶とショットグラスが準備されていた。マリはペペと自分用にシェリーを注ぎ、ペペはその大きなナイフで肉の赤の霜降り肉を切り落として、ナイフのままマリに「こうして食うのも、うまいもんだよ」とニヤッと笑った。

マリが光る刃の上ののった赤の霜降りを指でつまんで口のなかに入れて、ほどよい塩辛さととろける脂身がほんの少量なのに、口じゅうに広がり、そこにながしこんだシェリーがマリに、いいようのない陶酔をひきおこした。

「俺は、本当は建築家になりたかったんだ」

ペペは初めて自分が日本に来ていた理由を言った。本国スペインには、ガウディという大巨人がいる。死んで生まれ変わったって、スペインでガウディを超えることができないーそう思った若き日のペペは、東洋の日本という国に学んだならば、「自分の建築がうまれるのではないかと思った」というのだ。だが、結局建築家としてのペペに陽が当たることはなかった。

「俺がガキのころ、将来はガウディを超える建築家になって、毎晩ハモン・セラーノを何本もみんなバラす姿を夢見たもんだ。でも、日本でスペイン料理をひろめるのも悪くなかった。現代のハビエルの気分だったさ」

ペペはそう言って、シェリーを飲み干すと、マリに握手を求めた。マリはペペと男たちがするようなガッチリした握手を交わし、最後に一枚の皿をくれた。

「グラナダで息子がつくった皿なんだ。グラナダには赤い城があるが、グラナダの皿は青いんだ。いつか、スペインであおう。マリ。」

それ以来ペペには会っていない。

マリは、20代前半にカメラマン見習いを志したころから第一線で「食べて、書く」生活を続けてきたが、最近、自分のキャリアの集大成となる代表作を仕上げたばかりだった。一人赤い寝室に、20代から変わらないスタイルのまま、シーツに裸で大の字になっていると、ふと、ペペとの出会い、を思いだし、それは、懐かしいという一語で終わるものではなく、ペペとの出逢いはカメラマンをあきらめた後悔にもつながるのだ。

ペペが暗闇でナイフをとりだしてハモン・セラーノを切り落としていくときの動作にみなぎっていたスペイン男性の官能、あれをフレームにおさめたかった、とマリは思う。料理ジャーナリストとしての経歴をほうりだしてでも、もう一度カメラマンとしての自分の運命を試してみたい気持ちに襲われたのだった。

ランダム再生しているステレオは「ドン・ジョヴァンニ序曲」を再生していた。その曲想がマリアンダルシアを、グラナダを、アルハンブラを連想させて、マリは小声Te quiero！ と囁きおわると、飛行機の予約をするべくスッと起きあがって書斎に向かい、まず服を着た。